

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会

*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159

（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 17 号

☆2019 年(平成 31 年)

4 月 1 日 発行

★2018 年の茶の花忌報告

少し曇り気味ではあったが、晴れる時もあり、今年も雨の心配なく茶の花忌が開催された。1 時からの墓前礼拝では、今年も桜美林教会の小林茂牧師の司式で、重吉愛唱歌の讃美と牧師の感話があった。今年は八木重吉生誕 120 年だそうで、日本史及び世界史の視点を交えながら、重吉の歴史を見る目を、数少ない詩の引用をしながら語られた。重吉が生きた時代は後になって振り返れば社会変動のあった時代であった。米西戦争(1898 年)、日露戦争(1904 年)、ロシア革命(1917 年)が起こった。その中で重吉が政治や戦争をどう考えていたか。重吉の詩にはほとんど出てこない社会への関心だが、わずかに見えるロシア革命や共産主義の話題の詩を取り上げ、重吉がそれらに無関心と言うよりは、政治的な変革より内面の問題こそ大切なものであると考えていたからあまり詩にうたう事はなかったと語られた。

その後生家の庭での偲ぶ会は、世話人代表の加藤正彦氏の話で始まった。開会のあいさつ代わりに「茶の花」の話がされた。葉蔭に咲く地味な花だが、相原周辺で垣根の樹木として身近な花であり、墓所の垣根も茶の花であり、記念館が開館する時に、命日の催しを茶の花忌と名付けたことに加藤家の助言もあったとのことであった。続けて「重吉の詩を絶賛した詩人高村光太郎」と題し、重吉の詩が同時代人の共感を得、やがて命日の催しが始まり、ついに昭和 59 年の最初の茶の花忌となつて行ったことを話し、そしてもう一つ「TV に突然出て来た重吉の詩」という題で、NHK 教育テレビの番組の中で重吉の詩が取り上げられていたことを話し、重吉の詩が地味ながら自然に一般に取り上げられ浸透している事実を指摘された。

町田市民文学館の神林由貴子さんが今年も参加されたが、今回は田中清光氏のメッセージを代読され、体調がすぐれず参加できないけれど、いつも田中氏が八木重吉記念館の事に気を留めて心配して下さっていることを伝えられた。



草木が自然に枯れて行くように、すべてを自然に任せて帰る思いでもあるのではないかと指摘された。

今回は地元の青木幸雄さんの紹介で地元相原の朗読サークルによる重吉詩の朗読があった。町田や相模原など近隣からの参列者もけっこうあるから、地元での活動が盛り上がるのが最も望まれることであり、さらに活発に活動してほしいと思った。

今回はプログラムの進行が順調に進み、2 時 15 分には、最後の話としての私(小林)の「愛好会の活動報告」の時間となった。手短かに話すことを想定していたものの、茅ヶ崎や柏の他に、とくに地元で愛好組織が出てほしいことを訴えたので、15 分くらい話させていただいた。それでも今年は 3 時前には終わった。

詩人八木幹夫さんの講演は、今年は「八木重吉の詩に現れた死生観」ということで、「死のうかと おもふ／そのかんがへが／ひょいと のくと／じつに／もったいない ところが／そこのところにすわってた」にあらわれているように、重吉にとって死はいつも身近に感じられていたが、生きる希望を発見する方向に向かっていたことを指摘された。神様が与えてくれた命を自ら断つのは罪であるという考えも含めた熱心なキリスト教信仰の影響が強いのであろうが、八木幹夫氏は重吉が日本の自然を愛し詩にも多くうたっていることから、

終了後、いろいろな人との交流があった。現在の重吉生家の当主佐藤ひろ子様がかつて通っていた鶴川教会の牧師夫人である牧野恵美子さん、彼女は、現在は八木重吉愛好会の仲間の一人である荻幹央氏の教会の牧師夫人である。その他、日本キリスト教団出版局の人や熱心な個人の愛好者の方々と話す機会があった。今回は佐藤ひろ子様に加えてご子息の八木明男氏も来て下さり、挨拶を交わすこともできた。昨年と同じくらいの 80 人くらいの参列者（主催者関係入れれば 100 人近く）来られて、佐藤さんも安堵されたようだった。

茶の花忌で再会した愛好会の仲間たち数人と共に、記念館前のバス停 3 時 20 分のバスで橋本へ向かい、駅でお茶の時間を持ち、茶の花忌を振り返りながら、とても楽しい話し合いの時をもち帰途に就いた。

★茅ヶ崎で講演と鑑賞会、柏で北海道の会員にゆかりの場所の案内。

2019 年 2 月 2 日（土）茅ヶ崎市立図書館で、歌人で茅ヶ崎の「八木重吉の会」会長の川井盛次氏が、かつて詩碑『蟲』の建立時に話された「八木重吉の詩魂 1」に続く第 2 弾として、「八木重吉の詩魂 2」の講演がありました。今回は一方的な講演だけでなく、参加者の感想も聞きながら自由に語り合う形式をとったようです。川井さんが、前半は、＜貫く光＞、＜蟲＞、＜素朴な琴＞の 3 つを中心に自分の感想を語った後、参加者で自由に討論し、後半は＜母をおもふ＞、＜草にすわる＞、＜雨＞、＜ふるさとの 山＞及び柏にある詩碑の〈原っぱ〉について、同じように川井さんの感想と皆での討論をし、3 時間余りの時間が瞬く間に過ぎたと感じるほどに、活発な話し合いになったとのことでした。

3 月 24 日（土）、北海道からはるばる柏の詩碑を見たいと訪れた会員の伊藤さんを、天利武人牧師夫妻中心に教会で礼拝を一緒に持った後、詩碑「原っぱ」や重吉旧居跡付近を案内し、交流を持ちました。天気も良く、立派な石の中に刻まれた「原っぱ」に感激、また重吉が勤務した東葛飾中学（現高校）の庭を歩き、旧居跡の証拠である古井戸を見て、その後の交流の時も含めて楽しい時を持ちました。

現在、相原の生家を中心に南に茅ヶ崎、東に柏があり、それぞれの詩碑「蟲」と「原っぱ」を守りながら活動し、「素朴な琴」のある生家を支えるつもりで頑張っています。

蟲

蟲がいないて
いま ないておかなければ
もう駄目だというふうに鳴いてる
しぜんと
涙をさそはれる

素朴な琴

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐えかねて
事はしづかに鳴りいだすだらう

原っぱ

ずいぶん
ひろい原っぱだ
いっぽんのみちを
むしゅうにあるいてゆくと
こころがうつくしくなつて
ひとりごとをいうのがうれしくなる

★小沢則男氏による

八木重吉詩画展開催

茨城の愛好者で、一昨年の町田市民文学館での「八木重吉展」の時にも詩画を展示されていた小澤則男氏が、茨城県ひたちなか市にある「ギャラリー サザ」で＜手のひらの風＞と題して詩画展を開きますので、案内しておきます。JR の最寄駅は常磐線の勝田台駅です。



手のひらの風
小澤則男 作品展

日程：2019 年 会期中無休
4月2日(火)～8日(月)
開廊 10:00～18:30
(最終日は 15:00 まで)

会場：ギャラリー サザ
GALLERY SAZA

TEL:029-274-1151
FAX:029-274-1010

★新聞記事紹介（朝日新聞 2014 年 3 月 9 日）

「思い出す本 忘れない本」コーナーに 『永遠の詩 08 八木重吉』（小学館）を読んでの感想記事。

<無垢な魂を思い出させる> （筆者 俳優・高橋長英氏）

ああちゃん！／むやみと／はらっぱをあるきながら／ああちゃん と／よんでみた／

こいびとの名でもない／ははの名でもない／だれのでもない

中学の終わりころ、二つ歳（とし）上の姉が読んでいた少女雑誌をめくっていたら、この「ああちゃん」に出会いました。「わあーっ、そうそう、わかる。僕もそうだよ」。人間って時々、叫びたくなることない？ とくに、思春期のもやもやした気持ちは僕だけか、と不安だったから、ほっとしたのかな。

それからしばらくは、高校の友だちと『チボー家の人々』や『人間の条件』を「いま何巻読んでる？」と回し読みしたりして、詩とはご無沙汰していました。

だいぶたって、また読み始めます。中原中也や田中冬二もすてきだと思ったけれど、やっぱり八木重吉が残ってて、朗読会でも読むようになりました。たとえば、

ゆうぐれの陽（ひ）のなかを／三人の児（こ）が／

ななめの畑をのぼってゆく／みていれば なきたい

僕もそれを見たら、なきたくなっちゃうかもしれないと思う。

わたしのまちがいだった／わたしの まちがいだった／

こうして 草にすわれば それがわかる

誰にも、そんな経験があるんじゃないか。あの時はそういうことだったのかと。自分も本来持っているけれど、心のすみや外に追いやっている無垢（むく）な魂を、思い出させてくれる。だから心がささくれて、殺伐とした時に読むと、気持ちが静まるのかもしれない。

自分というか、自我をうたっているんじゃないよね。それなら、こんなに心打たれないと思う。大自然に身をゆだね、ちっぽけな自分を対象化している。自然と一つに溶け込んでいるから、透明感があって胸に響くのかもしれない。

八木重吉は、29歳で亡くなりました。奥さんのとみ子さんは、のちに歌人の吉野秀雄と再婚し、吉野の力を得て、重吉の詩が広く知られるようになったそうです。

十数年前に「高き彼物（かのもの）」という舞台をやりました。吉野の歌からとった題です。吉野は、とみ子さんと一緒に重吉の墓参りに行き、「重吉の妻なりしいまのわが妻よためらはずその墓に手を置け」と詠んだ。それもすてきな話だな。

この詩人を好きな人は「私、八木重吉好きです」なんて言わないで、そっと心の中にしまっているんじゃない？ あなたもしまっておきなさいよ、と叱られるかもしれないね。

★最近の八木重吉に関する本や雑誌の紹介

ほとんど毎年どこかで誰かが、八木重吉についての詩の選集、鑑賞や研究、詩画、詩写真などが出ています。八木重吉の詩は静かに人々の心に訴えています。2015年以降に出た本や雑誌を知る限りで紹介しておきます。

2015年4月10日『八木重吉 詩ときりえ』一粒書房 木村順一

2015年9月11日『祈りの道—八木重吉撰集』キリスト新聞社

2015年10月31日『エスペラント語と絵で味わう八木重吉詩集（絵本）』彩煌堂

2016年3月11日『八木重吉詩画集』童話屋の詩文庫

2016年9月10日『評伝 八木重吉の詩と生涯』風の家 田中清光

2016年10月22日『八木重吉—さいわいの詩人—』ことばらんど開館10周年記念展覧会冊子

2017年9月号『百万人の福音』で特集「じんわりくるよ八木重吉」

＊2017年11月25日『重吉と旅する』いのちのことば社

＊2018年2月号『いのちのことば』の中に、〈魂の詩人―八木重吉の世界〉（天利武人筆）

2018年9月25日『うつくしいもの―八木重吉信仰詩集』日本キリスト教団出版局 おちあい・まちこ

2018年11月17日『いのちの詩集 中原中也、立原道造、八木重吉』SDO Bunko

2018年11月号『カトリック生活』で、特集〈八木重吉―さいわいの詩人〉

＊の本については「とかす力」15号で内容まで紹介しています。

★茶の花忌関係者からのお願い

茶の花忌を運営している重吉生家の佐藤様や地域の関係者から、茶の花忌の歴史をまとめようという話が出ています。記念館が出来までの記念会の集まりも含めて、過去の茶の花忌の記録をお持ちの方はご協力をお願いします。とくに記念館の開館前の昭和28, 31, 33年の集まりの記録、また記念館の開館後の、昭和59, 60, 63、平成13, 14, 15, 18, 19, 20, 21, 24年については、記録が殆ど残っていないので、その年参加された皆様の中で、感想やメモを記録したものがあれば、提供していただきたいと思います。その他の年のものでも細かい記録を書いている方がいたら、コピー等を送っていただければ幸いです。

★八木重吉研究の資料発掘について

八木重吉全集や3人の伝記（関茂氏、田中清光氏、今高義也氏）によって、八木重吉の全貌はだいたい出尽くしてはいますが、ゆかりの地各地での生活の様子は、まだ研究の余地があります。また生家の消失で重吉の日記等の貴重な資料が失われて研究が困難な点がありますが、重吉の学生時代の理解は、平易な言葉を使いながらも研ぎ澄まされた感性を秘めている彼の詩を理解するうえで重要な部分です。とくに生家を離れて寮で生活していた鎌倉師範学校時代、東京高等師範学校時代は彼の思想や信仰の土台を形成して行った時代として、間接的な資料を通してでも研究を少しずつ進めて行くべきだと思っています。例えば八木重吉と登美子夫人の出会いの場所はどこでしょう？池袋駅（◆）から北東に5, 6分歩いて行った丸印（●）のあたりと思われます。

吉野登美子著『琴はしづかに』の中に池袋の常盤通りの奥で、石井という教諭の家に、重吉が下宿していたとあり、そこに登美子夫人が出かけて行って勉強を見てもらったという内容の記述。当時の古い地図で石井という名前の家のある場所を見ると、現在の池袋2丁目23-11のアパートcloud1の所、当時からあるお寺との位置関係からしてもそこだと思われる。



★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。第5集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（ kmat27aiko@gmail.com ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）